

中根辰栄

〈前回までのあらすじ〉

週刊誌の記者である赤江良平は、取材対象である記憶喪失者の山田浩平がフラッシュバックを起こした理由を探っていた。そこで、当日のテレビ番組を確認したものの、自分が想定していた番組内容との相違が発覚。この確認を急ぐ。一方山田は、読んでいた本に触発されて発生した謎の声に苦しむ。記憶喪失が真っ赤な嘘である可能性を示された赤江記者。記憶の断片が自分の手が届かないところで暴れ始める山田。果たして「山田浩平」とは誰なのか。

※※※

「これが番組の映像？」

「そう。例の編集長から貸してもらったやつ」

「今日明日で確認する、ってわけ？」

「そうそう。まあ、放映時間の記録もあるから山田さんがフラッシュバックを起こした時の内容だけ確認すればいいんだけどね」

「でも一応全体見た方が良いと思うよ。せめてフラッシュバックする前のところはさ」

「どうして」

「もうお父さん、ちよつと考えてみてよ。フラッシュバックが起こったのは確かだけど、発作みたいにぼつと出で起こるとも限らなくない？」

「それってどういう」

「見て少し時間たつてから頭の中で思い出して、それで過去の記憶とつながって。だからなんていうの、時間差攻撃、みたいな」

「思い出し笑い、ならぬ思い出しフラッシュバック、みたいな感じか。まあそれもありえるか」

「時間、どれくらいあんの？」

「えっと、チャンネルが九個あって、一局あたり二時間ぐらいだから……」

「単純計算で十八時間」

「……見切れねえわ」

「いいよ、私も手伝う」

「おいお前」

「半分にしたらちようど二日で見切れるでしょ？」

「まあ確かにそうだけど」

「それにあたしもヒマだし」

「部活とか勉強とか大丈夫なのか？」

「あたしだってバカじゃないんだなあ、これが」

「は？」

「課題は今日帰ってきてからとつとと終わらせたし、部活も今週休みなんです」

「ふうん、仕方ねえな。お前、一応言つとくけど」

「はいはい、口外しません。前に言ったのだから覚えているよ」

「それならいいですはいはい。じゃ、俺パソコンで確認するから」

「じゃうちはテレビ使わせてもらうね」

正直ワクワクしている自分がある。父親の仕事に多少なりとも関わるんだ。それも取材対象の人を遠回しではあるが調査する仕事だ。

「お父さん最初どの見る？」

「1チャンネル」

「じゃあ私8チャンネルから行くわ。それで後で合流」

「おっけ。じゃあよろしく。メモ忘れんなよ」

「わかってますって」

テレビにメモリーカードを挿しこむ。再生。広下がり

に流れる、ありきたりな絵面が動き始めた。

「山田さんだっけ、その人がフラッシュバックを起こしたの、いつだっけ」

「たしか午後の二時半」

「オッケー」

……

「んで、どうだった」

「白米と野菜炒めをパクつきながら聞いてきた。いまんとこ8と7しか確認してないけど、メモってこ

んな感じ」

白紙に書き込んだ箇条書きを見せる

・8チャンネル

トップニュース。ジョン・カーター氏の会見について。

(1時1分から2時5分)

おそらく本来のトップニュース。国会について。

(1時25分から1時47分まで)

ニュース。〇〇国の情勢悪化について。クーデター発生不可避で、緊張状態が続いているらしい。

(1時50分から2時10分まで)

ニュース。K県A市における予算不正利用問題について。市長の発言「私の懐事情でありえないことぐらい

わかるだろ」の発言で国全体からバッシング。

(2時12分から2時47分まで)

・7チャンネル

12時から放映中の番組で緊急中継。ジョン・カーター

1氏の中継と識者による解説。

(1時15分まで)

ニュース番組。8チャンネルと酷似。内容は以下の通り。

国会↓〇〇国↓K県予算問題↓A県での事故↓株価

(1時15分から1時45分まで)

ドラマ。韓流ドラマ。主人公がヒロインの家庭に初めて上がる。しかし過去の素性を正直に話して出て行け

と言われてしまう。

(1時45分から2時45分)

グルメ番組。中部地方の郷土料理。予定変更で時間が

ずれることへのテロップによる説明あり。

(2時45分から3時半)

「なるほどねえ。当初の予定と変わったところは？」

「7チャンネルが予定してなかったニュース番組でタイムテーブルを調整してるところかなあ。8は若干ずれ込んだだけ、っていうか。お父さんは？」

「いまのところ、1が番組再放送で生放送をお休みしたんだよね。それで、内容が大地震予測の話だった」

「それって関係ある可能性高くない？」

「たとえば、災害に巻き込まれて命からがら逃げてきた。それからずっとさまよってた」

「要するに災害の行方不明者、ってところか」

「そうそう」

「相当前だけど、災害で死亡扱いだった人が偶然保護されたってニュースあったよな」

「あれって役所の手違いでそうなってたんだっけ」

「うーん、ちよつと思ひ出せない。けど可能性はある」

「とりあえずご飯食べたら最後まで確認しよ」

「だな」

どうしても気になる。

「つーかさ」

「なに？」

「もうお前、れつきとした記者だな」

「なにそれ」

「ここまで調べものに付き合ってたんだから、もう取材仲間みたいなもんだよ」

「親子じゃなくて？」

「まあ親子だからってのはあるんだけどさ、それにしたってこども協力してるの、もう仕事仲間みたいな感じだよ」

「またまた。人手が足りないから手伝ってるだけだよ」

「……ありがとな」

「べつにー」

白米と野菜炒めをぱくつきながら、なんとなく嬉しかった。

……

「おわったー」

とつくに日付を越えていた。ちまちま停止しながらだと、これくらいかかるらしい。丁度上の階からも下りてくる音がした。

「終わったか？」

「うんまあ。メモもちゃんと取ったよ」

「ありがどう。どれどれ」

二人のメモを組み合わせると、ざっとこんな感じになった(下段表参照)。

「さて、この前言った内容は」

「ずれ込むよりもお休みしてる方が多かった」

「編集長のアドバイス通りか」

「結構変わってるから確認しな、って？」

「うん。番組編成ってこども変わっちゃうものなんだな」

「さすが元テレビマンだね。そういう事情わかってたんでしょ」

「んで、改めて見ると」

「8が県議会のニュース。K県に関連する可能性ありってことかな。7が韓流ドラマ。韓国繋がりがあってありえるのかな」

「移民とか、旅行の記憶があったりしてな」

「6が特集でいじめの話してた」

「いじめで記憶障害を起こす可能性はあるって言うしな。これも捨てられないな」

	8	7	6	5	4	2	1
13:00~13:10	トップニュース(ジョンカーター氏の会見)	緊急中継(ジョンカーター氏の会見・解説)	中継(ジョンカーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)
13:10~13:20					番組中のニュース	ニュース	ニュース
13:20~13:30							
13:30~13:40	本来のトップニュース?(国会について)	ニュース番組	本来のトップニュース?(国会について)	本来のトップ(国会)	特集(清掃道具の特集)	福祉番組	美術番組
13:40~13:50							
13:50~14:00	ニュース(外国の情勢悪化について)		ニュース(K県議会)	ニュース(K県議会)	特集(ファッション)	高校講座①(数学)	
14:00~14:10		韓流ドラマ				高校講座②(漢文)	
14:10~14:20						高校講座③(生物)	番組再放送(大地震予測の最前線)
14:20~14:30				特集(山梨県について)			
14:30~14:40	ニュース(K県議会について)		特集(社内いじめについて)		特集(南太平洋諸島について)		
14:40~14:50							
14:50~15:00		グルメ番組(中部地方)					

※斜線部はと同じ時間帯で前後の内容が重複する時間帯である

「あと、5の山梨県に関する特集も気になる」  
「当たってたら出身地とかそういうたぐいを絞り込めるな。ちょっと内容教えてくれ」

「んつとね、食べ物関係が多かった。果物の新しい販路についてとか、その加工に関する話とか」

「果樹園とかそういう可能性は？」

「あり得ると思う。フラッシュバックの時間に被るし」

「可能性はつきり増えるな。んで、俺の方は」

「どうだった？」

「1はさつき言った通り。2は高校講座だった。数学と、漢文と生物」

「ばらばらだね」

「高校時代を思い出した可能性、つてところか」

「高校時代を思い出す。実はそこでいじめを受けていて、とかは？」

「番組をまたいで、か。ザッピングして観てたなら、あながち間違いじゃないかもな」

「だね」

「残る4なんだけど、他と違うから浮いて見える」

「逆に引き金になった可能性もあるでしょ」

「……清掃道具にファッション、海外ねえ」

「どれもカギになりそうだよ？」

「あー、絞り込めないな」

「いっぱいキーワードは出るけど、キリがないね。どうする？」

「次の取材の時に、この表を出してみる」

「持って行けるものは、実物持っていつてみたら？」

「実物？」

「たとえばはほら、清掃関係だったら番組中に出てきた清掃道具を見せるとか」

「山梨とかK県だったらパンフレットとか、か」  
「だね」

「……今回は山場になるかもしれないな」

「うん……」

「……紅羽」

「ん、なに？」

「もう少し、手伝ってくれないか」

「なにを？」

「次回の取材、お前も来ないか？」

「え、いいの」

「編集長とかには内緒だけだな」

「なんでまた」

「……単純に荷物が多いから」

「清掃道具とかパンフレットを集めて、つてこと？」

「俺、記事書いたりとかで集めるの難しいからさ。ほら、集めるのに必要なお金はなんとかするから。この通り」

「こども頭をさげられては、引き下がれない気がする。」

「正直、私もここまで関わることになるとは思わなかった。」

「手掛かりを紐解くヒントはたしかに教えたけど、まさか取材内容を直接扱うところまできた。私も、一人の人間で、気になる気持ちはたしかに抑えられない。」

「もし見つかったら、お父さんが怒られるよ？」

「そこは本当になんとかする」

「……次回の取材っていつだったけ」

「十三日」

「わかった。ものができるかぎり集めてみる」

「……ありがとう」

「……ありがとう」

私も、一人の人間だ。山田さんの真実をどうしても知りたい気持ちは、記者の父と同じくらいまで来てしまった。後戻りは、どうしてもできないんだ。

※※

七月六日。あと一週間。

「お疲れです」

「おう」

「取材、来週でしたっけ」

「まあな」

「どうです、記事書けそうですか？」

「取材無くして進むことは無いからな。いまは他の奴らの記事手伝ってる」

「なるほど。大変っすね」

「お前の方は？」

「ぼちぼちっすね。単発記事でなんとか食いつないです」

「最近だと何書いた？」

「例のジョン・カーターですよ」

「あー、俺もあの教授には踊らされてな」

「どういうことですか？」

「まあそりゃいいよ。んで、記事はどんなよ」

「面白くなってきましたよ。俺の書いたやつでいいなら、見せますよ」

「んじゃあ、お言葉に甘えて」

後背が渡してきた記事は、こんなものだった。

「ジョン・カーター氏の語る人類の夢とは、ね」

「まあ読んでみてくださいよ」

「先日、全世界の主要メディアに向けて大々的な発表を行った米国物理学会の重鎮、ジョン・カーター氏。彼の新たな発表は会見後再び世界に発信され、学会の垣根を越えて注目を集めている。ジョン・カーター氏は六月二

十九日の会見後、会見時に整理できていなかった事実などを公式に発表した。七月二日に発表された文書によると、カーター氏は数百年以上にわたって人類の夢とされてきたある行為を可能とする理論を構築できたとしている。

この理論はあまりにも浮世離れしたものであり、人類の理解が追いつかない可能性があるとして、ここでも具体的内容は伏せるとした。ただし近目中に理論を実践におとしこめるために活動を行っていくとし、研究室の職員や関係者には既に内容をつたえたとのことである。一部メディアはこれに基づき、カーター氏の関係者にコンタクトを取って内容を尋ねたものの、徹底したかん口令が敷かれていたため全く内容を捉えることが出来なかったという。」

「まあその後の文章は読まなくていいです。カーター氏の話とか経歴だけなんです」

「ふーん。理系科目はさっぱりだし、物理学なんてなおさらだめだわ」

「調べるだけで頭の容量を上回ってくるような情報量ですよ、ほんと」

「取材は続けるの」

「まあ、直接カーター氏の研究を探るのはやらないにしても、なんか変なマニアが湧いてるみたいなのでそっちを突いてみようかなって」

「いいんじゃないか、変に首突っ込むより賢明だよ」

「ですよね。あ、それじゃちょっと編集とかで集まりあるんで、ぼくはこれで」

「おう、がんばれ」

手元から紙をかつさらって行ってしまった。入れ替わりに、きびきびと編集長の姿が近づいてきた。

「どうよ調子は」

「あ、お疲れ様です」

「芸能記事はどうなってる？」

「もうすぐ校閲終わるんで今日には出せますよ」

「ならよし。連載お休みとはいえ、代わりにこういうの頑張ってもらわないと」

「多少休んだっていいじゃないっすかあ」

「バカ、記者が仕事場来てぼけっとしてるのほどアホ面かましてるものはないわよ」

「厳しいっすねえ」

「……あ、例のテレビ映像どうだったよ」

「いやほんと助かりました。フラッシュバックと重なりそうなのは抜き出してみました」

「そう、ならよかった。心当たりはどんな感じだった？」

「番組の変更が結構あって、候補もそれなりにありますね。各局特集やつてるところが多くて、もしかしたらそれかなあって。あ、これ書き出したやつです」

「……うーん、まだアテはあるけど直接はわからない状態よね」

「ですね。取材の時にそれとなくワードを出してみても、反応を見た方が良いかなって」

「直接言うんじゃないわよ、もしかしたらまたこの前みたいになるかもしれないんだから」

「わかってます」

「取材対象をいたわることもまた、記者の義務よ」

「はい。でも俺」

「なに？」

「勝手にですけど、思い出させることも必要なんじゃないかって思ってるんです」

「理由は？」

「アイデンティティ、っていうんですかね。山田さんは

それを記憶喪失でぼっかりと空欄にしている。それって生きていくうえでとんでもない足かせになってしまっているんじゃないかって思うんです。過去がないことは、語れるものもないってことに直結しますから」

「身体だけが進んでいくのに中身がからっぽなのは、生きていくうえでとてつもなく大きな問題になるって？」

「そう、そんな感じですよ」

「確かにね。けど、あんた忘れてることがあるわよ」

「え？」

「記憶喪失のメカニズム」

「……記憶喪失は、脳が身体や精神を守るためにとるひとつの手段だったことですか」

「そのトリガーになったのは、間違いなく負の遺産だと、私は思うね」

「それを思い出させるのは、酷すぎる」

「その通り。あんたがその責任を負えるか、って話よ」

沈黙が場を制する。

「第三者である人間が、この繊細な問題にどこまで首を突っ込んでいいのか、私にはどうとも言えない」

「たしかに」

「まあでも、あんたに明確な意思があるのなら、話は別よ」

「そりゃもちろん、あります、ありますよ」

「それは記者として？それとも、山田浩平という人間を見つめる人間として？」

要するに、職か人生かと問われている。山田さんをネタとして扱う職業記者、一方では記憶喪失へと彼と共に立ち向かっていく一介の関係者である。最初こそ前者ではあった。けれど数回とはいえ思い出せるか否かを問い、

思い出そうと悶え続ける彼に寄り添おうという意思が化

確立しつつある。

「……どっちも、つていうのは答えとしてどうなんでしょう」

「ふーん、ひとつの正解なんじゃない？ 私に答えは出せないよ」

「はあ」

「けど意思があるのはいいことだ。そのまま行きな」

進むことが、彼にとつてどういう意味になってくるかなんて、正直未知数だ。けど、俺は進むべきだという考えがある。それでいいのかと自問すれば答えにはまだ窮する。けど、やっぱり意思があるのに変わりはない。

「書きますよ、やっぱ」

「いいよ。あんたがそうしたいなら」

「……はい」

来週が、本当の勝負になりそうだ。

※

「十三日」

久々の取材を受ける日である。取り敢へず謝りたいと思っている。何せ無理強いで自分が床に臥している中で取材をしてくれとせがんでしまい、赤江さんには困惑と余計な心配を掛けてしまった。

確かに取材対象としてさういう類の事は許されるのだろうか。然し乍ら赤江さんからすれば、症状を出したばかりの人間になんといふことをしているのか、とか取材対象である人への配慮の欠片も無いなどの風評被害が出かねなかった。

あの後数日で普通の生活に戻り、今の処は此の前のやうな症状も出ていない。

「お詫びの品を赤江さんに渡したいのですが」

と、数日前に話した。

「お詫び？」

「倒れた後に無理を言つて取材させてしまった件で」

「あゝ、それなら」

園長と話して、私自身で品を選ぶことにした。記憶を取り戻す手掛かりを探してみる事も兼ね合いだつた。

此の町は所謂都心である。店の数は星程在り、行く前に店だけは決めておくとした。選んだのは和菓子のお店だつた。商品は水羊羹の詰め合わせにした。予約は園長に託した。

「最近電話予約だけしなくて、ねつとでも出来るから」

この時にいんたあねつとという言葉を知った。簡単に言えば、世界中のありとあらゆる情報が携帯電話などの媒体を介して調べることが出来るらしい。とんでもない世の中だ。膨大な情報を知る事が、さうも手軽に出来る世の中らしい。

ふと、私の知り得る情報が如何に矮小であるかを考えた。並の人間は過去があり、その過程でいんたあねつとだのを含めた莫大な数の媒体から情報を得てきた。其れが記憶に留まっているか否かはさておき、私の比ではない情報量を持つのだろうか。

私は、喪っている物が多すぎる。戻るアテも無い。さう考えると、矢張記憶を取り戻すことが猶ほ更必要に感じられてきたのである。

戸を叩く音がした。

「はい」

「私です」

「園長、どうぞ」

「山田さん、此れ」

件の水羊羹だ。冷蔵しておいてくれたものだつた。

「有難う御座います」

「ちゃんと渡してね。あ、あとこれ。取材の合間にでも食べて」

「此れは？」

「ゼリイ。果物の」

「ああ、どうも」

「あと十分位です、て連絡がありましたから」

「分かりました」

「ぢや、また後で」

僅かに結露を出した白い箸器が二つ。スプーン。あとは記者が来るのを待ただけだつた。

……

「いやお待ちせしました」

「とんでもない。あの」

「はい」

「此れ、先日のお詫びと謂つては難ですが」

「いやいや、これはどうもご丁寧に」

「此の前は無理をさせてすみませんでした」

「お氣になさらず。だつて山田さんきつての御願いでしたから」

「しかし上司とかに何か言われませんでしたか」

「事情は理解してくれたやうでしたから」

「あゝ、なら良かった。あと、これ園長さんが合間にでもどうぞ、て」

「いやこれはどうもすみません。後で頂きます」

「あ、ゼリイらしひので早めに召し上がつて下さい」

「さうですか。……なら取材前に戴きますか」

「さうですね。あ、でも一つ足りないや」

「え？」

「いや実はですね、今日来たのは私だけじゃないんです」

「どういうことですか？」

「余りに荷物が多いのとかあつて、実は娘が」

廊下から物音がしたのはさういう訳らしかった。

「赤江さんの娘さんが」

「え。いまトイレに行つてまして。じき来ますから」

戸を叩く音。

「あ、紅羽、入つて良ひぞ」

「失礼します……」

制服と思われる姿の少女だった。僅かに茶色がかった

髪に、黒黒とした瞳。

「こんにちは……」

「此方が山田さん」

「はじめまして。赤江紅羽と申します」

「正座して丁寧なだうも。山田浩平と二応、申します」

「宜しく願ひします」

「……其れで、今回の取材ですが」

「はい」

「記憶についてもう少し踏み込まうと思つております」

「え」

「ですので、若し御辛いやうでしたら正直に仰つて下さ

い。其の時点で取材は中止します」

「分かりました」

「宜しいですか」

「私」

「はい、何か」

「思ひ出すのは、覚悟の上ですから」

「……了解しました。では」

少女が持つてきたらしひ物品を手元に移した。

「今回は、先日のふらつしゆばつくの際に山田さんが観ていたと思われる番組を探してみ、関連するであらう物をお見せします。もし、心当たりが在る時には正直に仰つて下さい」

「はい」

「では先ず」

写真集たつた。崩壊した街が表紙を飾つていた。

「此方は過去に発生した大地震の記録写真集です。何か心当たりは」

確かに見るのは辛い。だが、何か思い出すような感覚

は無い。

「いいえ」

「わかりました」

娘さんがメモを取つてゐる。

「では次に」

大きな文字で漢文と生物と書かれた本を出してきた。

「まあ此れは娘なのですが、教科書です。2チャンネルで

は高校講座という番組がありまして、時間的にこの教科

ではないか、と思われます。如何でせう」

漢文は習つた事がある気がする。何となくは理解出来

る。生物は殆ど用語が解らない。

「漢文は多少理解できます。けど、此方の方は」

「……で、生物は心当たりが全く無し、か」

くれはさんがぼつりと呟く。

「大丈夫か？」

「うん」

「よしぢやあ次」

「ごめん、此れ先にして」

「わかつた。是れは如何でせう」

「此れは？」

「昨今社会問題となつてゐる会社内のいじめに関する新聞の切り抜きです」

「……読むのはかなり辛いですが、思ひ出すことは特に」

「はあ。では」

一枚の紙を渡してきた。

「4チャンネルでは、山梨県の特集が行われていました。

あと8チャンネルではK県の特集を放映してしまし

た。何か心当たりがありますか？」

「……山梨県の方は、行つた事があるとは思ひます。け

ど記憶が呼び起こされるやうな感覚はそれ以外特に」

「さうですか。では次」

薄めのケースを取り出した。

「7チャンネルで現在放映中の作品です」

海外か。いや、韓国だ。かういう名は多分さうだらう。

……韓国？

「……あ」

「何か！」

一気に赤江記者の表情が変わる。

「行つたことがある。多分」

「具体的に思い出せる事は在りますか」

「……いや、風景とか何をしたとかは思い出せません

けど、韓国ですよ」

「はい」

「い、行つた事があるのは、多分、ある、かも」

「分かりました。有難う御座います」

「……反応在り、と」

「では最後です」

一枚の冊子だつた。緑が多く、人々の様相も此の国と

は全く異なる。

「南太平洋諸島に関する特集があつたのですが、何か」

……

「山田さん？」

「……」

「大丈夫ですか」

「……なにも、思い出すやうな事は無いです」

「わかりました」

「……」

淡々とくればさんがメモを記してゐた。

「では最後に。先日以降、何か新たに思ひ出したこと等は在りますか？」

「……いえ、全く」

「さうですか。分かりました。……此れで、今日の取材は終わりです」

全員、嘆息を漏らした。

「お疲れさまでした」

「いえ。こんなに調べて下さったのに、何も思い出せなくてすいません」

「いえ。記憶と云うものはさう容易く戻るものではないですから。すみません、御手洗いに」

「どうぞ。右の突き当りです」

「どうも」

とと、と赤江さんが去つて行く。部屋の中、少女と二人きりになる。

「……あの」

ふと、意識の外から声がした。

「はい？」

「一つ、いいですか」

「何か」

「肌、結構焼けてますね」

意表を突く言葉だった。つい鼻で笑う。

「さうですかね？」

「なんかかう、勝手なイメージで色白なのかなあ、とか思つてたんですけど、まるで外作業がご職業の方みたいだな、て」

「どうでせう。さういう人は、筋骨隆々とした容貌では」

「ですよ。山田さん、かなり細身ですしね」

「……？」

「あの、なにか」

「……デ

「あゝ、いえ」

戸が開く。赤江記者だ。

「いや、お待たせしました。今日是有難う御座いました」

「いいえ。記事の作成、宜しくお願ひします」

「はい」

「あ！」

「何か！」

二人が、私を凝視してきた。

「……ゼリイ、食べて下さい」

机上の白容器の結露は、縁取りに沿つて立体的な池を作つていた。容器に吸い付いて離れることは、さうさうない。

※※

「じゃ、今日の取材まとめ」

「山田さんが観ていた番組は、反応から見ておそらく7チャンネルの韓流ドラマ。たまたまチャンネル回して観たんでしょう。行ったことがある、つまり韓国への渡航歴がある。これはかなり重要な手掛かりだね。まあ他にも微妙な反応があつたのは、5チャンネルの山梨県。でも日本人

なら行つてもおかしくないから、手掛かりとしては力が弱い。記憶喪失にいじめとかが関わっている可能性もほぼないと言つて過言じゃない。南太平洋諸島については、言葉数が少ないけどあんまり反応は無かつた。本人の言うことを尊重すれば、まあほぼ関係ないかな。こんなところ？」

「オツケー。これでかなり進んだな」

「でもよかつたね。またフラッシュバックを起こさないで」

「うん。正直心の中でヒヤヒヤしてた」

「とりあえず、来週の記事は書けるよね」

「ああ。今回は良い按配の記事になるだろう」

「ねえねえ」

「なんだ？」

「これ、メモとかには書いてなかつたけど、ひとつ感じたこと言つていい？」

「ああ」

「南太平洋諸島の件でさ」

「うん」

「表情すごく曇つてなかつた？」

「そうか？」

「なんかそこだけ他と違うなあつて」

「けど、ちゃんと見てなにか心当たり無いかじっくり見ただけじゃないのか」

「かなあ、わかんないけど」

「でもとりあえず、記事はメモベースを進めるよ」

「うん」

「ほんと、今日はありがとな。悪いな、学校休ませて」

「……みんなには内緒だからな」



「分かってるって。それより、貰ったゼリー。冷やして  
後で食べよ」

「そうだな。ちなみに味ってなんなの？」

「えっとね、あ、マンゴー味だつてさ」

「へえ。俺も食えるな。メロン俺だめだからさ」

「そっだったね。じゃあ一緒に食べようね」

「だな」

「あともらった羊羹、見た？」

「ああ、結構いいやつだよな」

「結構どころじゃないよ。創業二百年とかするお店だよ」

「まじか。あとでお返しした方が良いかな」

「かもね」

……

忌々しい場所。

あの、絶望に打ちひしがれ、紅を見た場所。

あの去りゆくかつての光景。

誓い。そんなものの保証なんて、無かったんだ。

ここは、夢の跡。そして、